

パスカルの「三つの秩序」

永 瀬 春 男

I

ルイ・ラフェュマの業績が、「パンセ」研究史上画期的なものであったことは、広く承認されるところであろう。フラグマンの雑然たる集積とみなされてきたこの作品から、ラフェュマはパスカルの企図した「キリスト教護教論」（アポロジー）のプランを探り出してみせた。現存する断章の約3分の1は、死の数年前、パスカル自身の手によって分類され、表題を持つ27の章に配分されていたのである。この発見により、諸断章は、著者の構成的な意志に支えられた、ひとつの有機的な連関のもとに立ちあらわれ、その独自の展開を露わにするに至った。

本稿は、パスカルの有名な「三つの秩序」 *trois ordres* の思想を、この新しい視野の下で捕え直そうとする試みである。「三つの秩序」は、パスカルの読者には良く知られた思想であるにも拘らず、この表現自体、全断章中に二度しか見出されない（L. 308, L. 933）ためもあって、従来他の諸思想との関係を問われることは少なく、比較的独立して記憶されてきたように思われる。けれどもこの思想を、「アポロジー」のプランの中で把握しなおすならば、その位置と役割とには重大なものがあると思われる。即ち、私見によれば、「三つの秩序」は、「アポロジー」のすべての主要な概念が集約され総合される場であるとともに、その構造は、作品としての「アポロジー」の構造自体と或る呼応関係を持っている。以下この点を明らかにしてみたい。

II

trois ordres という表現を含む二つの断章のうち、より決定的な形を伝えている断章 L. 308を、いま *ordre* の構造にのみ目を向けて要約すれば次の二点

になる。

1) 三つの *ordre*, 即ち身体・精神・愛があり, おのおのが固有の偉大さを持つ。

2) *ordre* 間の距離は無限であり, 下位の *ordre* の偉大さも, 上位の *ordre* では無価値である。つまり *trois ordres* は, 価値の観点からみて, 相互に次元を異にする垂直的な構造を形成する (図 1 参照)。

さて, 上の第 1 の点, つまり事物には固有の *ordre* があるという考えは, パスカルには, 信仰と科学の領域の弁別という形で, 殆ど幼少期から親しいものであった。この考えは, ノエル神父との論争, 「真空論序言」, クリスチナ女王宛の書簡, そしてプロヴァンシアル論争といった幾つかの著作と活動を通して, 次第に強固で具体的な方法に結晶していくのであり, この一連の過程を *trois ordres* の思想形成の前段階とみなすことも可能である。

しかし同時に, 「パンセ」以前の段階におけるこれらの前形態と, L. 308 との間には, 根本的な差異のあることも見逃せない。上に列挙した前段階にあっては, クリスチナ女王への手紙を例外として *ordre* は単に同一平面上に於て相互に区別される関係, いわば同次元並列的構造を示しているにすぎない。これと L. 308 との構造上の隔たりは, 無論思想的な隔たりに由来するのであって, 私見によれば, 後者の異次元隔絶的な構造が成立するためには *ordre* の区別という方法が, 人間の悲惨という現実に応用されることによって, 新たな展開を見せることが必要だったのである。

小品「ド・サシ氏との対話」が, この展開の簡潔な素描を与えてくれる。「対話」は, 人間の偉大と虚弱の一面ずつしか認識しなかったエピクテトスとモンテーニュの批判を主題とする。パスカルによれば, 二人の賢者は, 自然というひとつの主体に対し, 一方が偉大を, 他方が虚弱を与えることにより等しく誤まった。これに対し, 福音の真理は, それらが異なる主体, 即ち弱いものはすべて自然に, 強いものはすべて恩寵に属することを教えて, 人間的教説に於ては両立しえない対立を調和させる。

つまり人間の偉大と悲惨という矛盾・相反は, 人間的自然の *ordre* の内部で

は解決されえず、キリスト教という超自然的真理の介在によって、天地二元の *ordre* に分け置かれねばならないのである。こうして、人間的な哲学者の一元的立場に対して、次元の垂直的対立の構造が成立するわけである（図2参照）。

さて注目すべきことは、ここ見られる相反から *ordre* の次元的対立へという展開が、「アポロジ」第一部人間論の叙述に、正確に適用され、独自の〈動き〉を作り出しているということである。次にこの点を検討する。

III

「アポロジ」第一部「神なき人間の悲惨」を論ずる部分が、第10の綴りまでに相当することには異論は少ないだろう。第1章「秩序」を別格として、この部分は更に第7章までと第8章以後とに二分できるが、それぞれの部分に於て、上で見た相反から次元的対立へという展開が指摘できるのである。

前半部についてみるならば、最初の三章、即ち第2章「空虚」、第3章「悲惨」、第4章「倦怠」が、本来の意味での人間の悲惨の描写に当てられ、それに続く二つの章で偉大さが論ぜられる。

この場合、悲惨と偉大の二側面は、無関係に並列されるのではなく、悲惨自体から偉大が結論されるのであり、第5章「現実の理由」は、このパスカル的方法を示して興味深い章である。この章でパスカルは社会的正義の無根拠をあばいたあとで、正義の存在を信ずる民衆の無知が、結局有知の無知と一致することを示して、現状の是認へと向かうが、そこに用いられる「漸層法」が、第6章「偉大」に於ては人間的現実に応用され、人間の持つ悲惨の意識自体から、その偉大がひき出される。しかしまたこの方法によれば、偉大は決して最終的な到達点ではなく、悲惨へと再び転化されずにはいない。悲惨を意識することは、偉大であると同時にまた悲惨だからである。

ここから我々は第7章の表題である「相反」に導かれる。相反の一方の側のみを認識することは危険であった。しかし相反の両面をともに知るとき、人間が直面するのは自己の不可解な怪物性という事態に他ならない。悲惨を知るものには偉大を、偉大を知るものには悲惨を示しつつ、ここでパスカルは、自然

の *ordre* に留まる限り、この相反を解決する道が閉ざされていることを宣告する。では「誰がこのもつれを解くであろうか？」(L.131)。「アポロジー」に於ては、ここで初めて、明瞭な形で超自然的真理の介在が要請される。「汝の知らない汝の真の状態を、汝の主から教えられよ。神のことばを聞け」(同)と。この真理とは、人間が源初の完全な段階から失墜したという原罪とその遺伝の教義であり、理性にとっていかに不可解であろうとも、この教義なくしては、人間の相反の不可解性は説明がつかないとされるのである。

こうして、同一次元内での悲惨と偉大の相反は、原罪の教義の導入によって、天地二元の垂直的対立の構造へと転換されるのである。

続く後半部は、幸福の問題を扱う。第8章「気ばらし」と第9章「哲学者たち」に於て、パスカルは二つの誤まった幸福追求を批判するが、それらの誤謬は、人間の相反の一面的な認識に由来するのである。即ち一方は悲惨のみを見ることによって「気ばらし」の中に自己を見失い、他方は偉大のみを見ることによって傲慢へと走る。前者は喧噪を絶えず追い求めながら、真の幸福がそこにはないと感じている。後者、ストアの哲学者たちは、神を愛の唯一の対象としながらも、自己の腐敗を知らず、独力で神へ到達できると考えることにより誤まった。彼らの教説は通常の人には困難であり、イエス・キリストを欠くことによって無益でもある。

結局幸福をめぐる人間の位置は、第10章「最高善」に於て「渴望と無能」という言葉で規定される。あらゆる人間が、あらゆる時と所で幸福を求めながら、その目的に達しえずにいる。「では、この渴望と無能が我々に教えるものは何であろうか？」(L.148)。それは人間がかつては真の幸福を所有していたが、それを失い、今や空虚な痕跡のみを留めているという事である。この無限の深淵は、無限なる神によってしか満たされず、従ってひとり神のみが、人間にとって真の善であると結論される。

我々はここで再び、原罪の教義の導入を介して、天地二つの *ordre* の垂直的対立の構図へと導かれる。こうして「アポロジー」第一部は、相反から次元的対立へという軌跡を二度描いて完結するのである(表1参照)。

ここまでの考察からしても、「アポロジー」のプランには、パスカル以外の人物によるとは考え難いロジックの一貫性が確認できるのではなかろうか。

さて第一部人間論は、神と人間、超自然と自然という二次元の対立に我々を導いて閉じられた。二つの *ordre* は提示されはしたが、その間の移行の手段を未だ与えられていない。いかにして人間は、自己が失墜した源初の完全な状態に復帰できるであろうか。自己を無限に超える *ordre* のうちに指示された幸福を、いかにして獲得できるであろうか。それが「アポロジー」第二部の主題である。

IV

第二部の構成は、第一部に比べてはるかに複雑であり、各章の役割を正確に決定することは私の力に余るが、諸家（メナール、エルンストなど）の見解に学びつつ、一応の見取り図を示しておきたい（表2参照）。

特に役割を限定し難い第11章をひとまず総序と考え、これと第27章「結論」を除く十五章を大きく二分する。前半四章では、まず探究の必要性が説かれ、続いて理性の役割と限界が論じられる。

後半部が本来の宗教論であり、まず真の宗教の条件が述べられ、次にキリスト教の原理として隠れたる神、および象徴の理論が提示される。続く部分はキリスト教の証明であり、永続性、イエスのひととなり、予言の成就を三本の柱とする。最後にキリスト教道徳が論じられる。

以下の検討では、表2に掲げた主要な概念を、天地二つの *ordre* 間の移行の手段は何かという観点から考察してみたい。

前半部に於ては、まず実存的不安の喚起を通して探究の必要性が強調されたのちに、信仰に於ける理性の役割が限定される。第一部で我々は天地二元の対立に導かれたが、この垂直的構造のなかで、理性は無力とされ、服従を命ぜられるのである（第13章）。「二つの無限」（L.199）により自然的平面で既に限定を受ける理性は、更に超自然的事柄を前にしては服従以外に為すところを知らぬとされる（L.188）。

また第14章では、理性による神の証明が無力で無益なものとして退けられ

表 1

PREMIERE PARTIE

première étape :	misère (2°, 3°, 4°) — grandeur (5°, 6°) — “contrariété” —	
	opposition des deux ordres (7°)	
seconde étape :	divertissement (8°) — philosophes (9°) — “contrariété” —	
	opposition des deux ordres (10°)	

表 2

SECONDE PARTIE

11° “A. P. R.”	introduction		
12° “Commencement”	nécessité de la recherche		
13° “Soumission”	} rôle et limite de la raison		
14° “Excellence”			
15° “Transition”			
16° “Fausseté”	} condition de la religion		
17° “Religion aimable”			
18° “Fondements”	} principes de la religion chrétienne	{ (1) “Dieu caché” (2) “figure”	
19° “Loi figurative”			
20° “Rabinage”	} démonstration de la religion chrétienne	{ (1) “perpétuité” (2) personnalité de J.-C. (3) prophéties réalisées	
21° “Perpétuité”			
22° “Preuves de Moïse”			
23° “Preuves de J.-C.”			
24° “Prophéties”			
25° “Figures particulières”			
26° “Morale chrétienne”			
27° “Conclusion”			

(L.190), ただイエス・キリストによってのみ, 人間は神を知りうるとされる (L.189).

それでは, *ordre* の垂直的構造に於て無力を宣告される理性に代わって, 何が二つの *ordre* 間の移行の手段となり, 信仰を保証するのであろうか. 未分類綴りをも含む「パンセ」の全体を検討するなら, それは心情であると答えうる

であろう。パスカルの思想によれば、信仰は神の恩寵の賜物であるが、神が働きかけるのは理性にではなく心情にである (L. 424)。この心情による直観なくしては、信仰は人間的なものに留まり救いには無益である (L. 110)。また後に見る如く、イエス・キリストを証明する予言とその成就が、確実に明白な証拠たりうるのも、ただ直き心情に対してだけである。

こうして我々は今や理性と心情という、人間のうちにある二つの *ordre* の垂直的構造について語りうる。理性は超自然的 *ordre* の前では無力であり、人間はただ心情によってのみ自然の *ordre* を超え、相反のもつれを脱出する可能性を有するのである (図3 参照)。

第二部後半では、まず真の宗教の条件と他宗教の虚偽が指摘される (第16章)。第一に、真の宗教は、予言・奇蹟・証人などの外的な証拠を持たねばならず、この点に関して他宗教は権威を欠いている。第二に、真の宗教は人間の悲惨と偉大の両面を知り、その理由を教えるものでなければならない (L. 215)。また唯一の目的としての神を愛する義務とともに人間の無力を教え、それに対する治療法を与えねばならない (L. 205)。この点についてもキリスト教だけが条件に適う。なぜならキリスト教のみが、アダムの上原罪によって人間の相反の起源を説明し、イエスの来臨と死によってこの相反を癒すことができるからである。このように「アポロジー」第二部に於ても、相反は極めて重要な概念である。他宗教の虚偽は、人間のこの相反を知らぬこと、あるいはこの相反の背後に二つの *ordre* の垂直的対立を見ないことに存するといえるだろう (図4 参照)。

次にキリスト教の原理を論ずる章に移ろう。第18章「基礎」の主題は隠れたる神である。完全な明るさは人間を傲慢に導き、完全な暗さは絶望に導く。そこで神は、求める者、見ようと欲する者には、自己のしるしを与え、求めようとせぬ者には、それを拒む。真理は、ここではいわば求める者の態度と相関関係にある。キリスト教は求める者にとってしか確実ではない (L. 577 参照)。ここには、理性によって把握される真理とは、全く異なる真理の概念がある。そしてかかる真理を求め、見出すのは、パスカルの用語に於ては心情である (この点の論証は省略)。従ってここにも理性とそれを超える心情という二つの or-

dre の垂直的構造が看取される。「神は精神よりも意志を傾かせようと欲する」(L.234)ということばも、同じ構図のなかで理解すべきであろう。

第19章「象徴としての律法」では隠れたる神の理論が聖書に対し適用される。この章では心情の役割は、身体との対比という新しい観点から、はっきりと語られる。聖書が字義的と靈的の二重の意味を持つのは、神が求める者以外に対しては自らを隠すのと同じ理由からである。そしてこの象徴を読みとくのは心情である (L.255)。より正確に言えば、象徴を正しく読みとくか否かは、心情のあり方いかんにかかわる (L.503)。二種類の人々、二種類の心情がある。例えばユダヤ教徒は、約束された幸福を物質的にのみ解釈し、肉的に偉大なメシアを待望したために、イエスをその卑賤と死に於て見そこなった (L.256)。心情をこのような対極的な二方向に導くのは、それを支配する恩寵と邪欲である (L.502)。いま恩寵に導かれて象徴を読みとく立場に対して心情という名を残すならば、邪欲に支配されて肉적誤謬に陥る他方の立場は、身体 (corps または chair) と呼ぶのが最も適当と思われる。パスカル自身が、心情をこのことばと対比させて用いているからである (L.270など)。

我々は先立つ箇所で、人間のうちに理性と心情という二つの ordre の垂直的構造を指摘したが、ここでは身体と心情の ordre が形成する垂直的構造に立ち会うのである。心情は象徴のヴェールをつきぬけて自己を超え出る可能性をもつのに対し、身体は地上的・肉적意味に固執して、自然の ordre のうちに迷うのである (図5参照)。この二つの ordre は、元来「自らが愛するものを善と呼ぶ」(L.255)とされる心情のもつ二つの可能性であり、両者の間には象徴するものとされるものという関係があるわけである。

以上の象徴の理論は、隠れたる神の理論とともにパスカルのキリスト教の重要な原理であって、あとに続く宗教の証明は、いたる所でこの理論に基礎を置いている。従ってそこに於ても、ordre の垂直的構造と、その構造に占める心情の役割の重大さを、当然指摘できるのである。永続性、イエスのひととなり、予言という三つの主要な点について、それを考察してみよう。

まず第21章で、パスカルはキリスト教の「永続性」を強調する。原罪とメシ

アによる救済を信ずるところに存するこの宗教は、キリスト来臨前にはユダヤ教徒のうちに、来臨後は教会のうちに、絶えることなく存続してきたが、この永続性は神的なものであり、この宗教の真正さを証明するものとされる。しかしながら、ユダヤ教とキリスト教に一貫して存在したこのメシア信仰は、二つの宗教に於て決して同一のものではなかった。ユダヤ人は肉的に偉大なメシアの輝かしい偉業を期待したため、イエスを見そこない十字架にかけた。けれどもパスカルによれば、キリスト教徒にも肉的な人々のいるように、ユダヤ教徒にも真のユダヤ教徒ともいべき人々がいて、彼らは、自分たちを罪から解放し、神を愛するように仕向ける一人のメシアを待ち望んでいた (L. 286)。こうして二種類のユダヤ教徒、二種類のキリスト教徒という区別の導入によって、ユダヤ教からキリスト教への時間的な連続性は、ordre の垂直的構造に転換して理解することができるだろう (図 6 参照)。無論この二種類の人々を分かつのは心情のありようであるから、この構図は心情と身体の ordre の垂直的構造 (図 5) に帰着するはずである。

第二のイエスのひととなりによる証明は L. 308 自体を含む部分である。メシアの予言と同様、イエスのひととなりも或る暗さの中にある。ユダヤ人や歴史家は彼を認めなかった。しかしこの暗さも、心情の ordre に於ては輝かしい莊麗さに変わる。愛の ordre の偉大さを見るのは、ただ心情の眼だけなのである。

ここで心情の ordre と愛の ordre^{シヤリテ} の関係を明確にしておく必要があるだろう。愛はパスカル自身言明しているとおりに超自然的なものであるのに対し、心情はあくまでも自然のうちにある人間の機能である。しかし心情は神を感じ、愛することのできる機能である。自然的 ordre 内に位置づけられながら、心情は無限と超自然に対して開かれており、人間はこれによってのみ自己の自然、自己の悲惨を超克しうる。こうして恩寵に導かれた心情が、神を求め、神を見出すところに成立するのが愛の ordre であって、それはもはや自然を超えたものであると言えよう。

第三の証明、予言とその成就については、多言を要しない。既に象徴の項で示された予言の基本的性格を想起すれば足りる。既ち予言は象徴として与えら

れたものであり、二つの意味を持つ。従って予言の理解も、その成就の検証も、等しく心情のありように左右されるのである。かくして宗教論のいたるところで、我々は *ordre* の垂直的構造と、そこに占める心情の重要性を確認するのである。

第26章「キリスト教道徳」の要点は、「神のみを愛し、自己のみを憎まねばならぬ」(L.373)ということばに尽くされている。この章に心情という語は使用されていないが、神を愛するのは心情であり、人間のうちにあって自らへりくだるのも心情である。

第27章「結論」では、心情の重要性は疑いえぬほどはっきりと語られる。ここでパスカルは、予言や証拠を知らず、また聖書をも読まずに信ずる人々をとりあげ、「神が彼らに神への愛と、彼ら自身への嫌悪とを与え、心情を信仰の方へ傾かせるのである」(L.380)と言う。彼らは自己の義務と弱さを心情に於て悟り、宗教について心情によって判断するのだとされる。

宗教論の少なからぬ部分を費して試みられた、旧約および新約聖書による証拠の提示のあとで、このような証拠も信仰にとって絶対の必要物ではなく、神への愛とへりくだりこそが肝要であり、心情を傾けることによってこれを与えるのは神自身であると述べられていることは注目に値する。

第27章の最終的表現は、「神を知ることから、神を愛するまでには、何と遠いへだたりがあることか」という一行である。これによってパスカルは、再び精神あるいは理性による認識の無限の高みに、心情による神の愛をおき、これこそが真の回心であると結論するのである。

V

さて「アポロジー」第一部は人間を悲惨と偉大の相反に於てとらえ、そこから我々を天地二元の *ordre* の対立へと導いた。第二部はこの *ordre* の垂直構造における、人間の *ordre* から神の *ordre* への移行を問題とした。そしてパスカルはこの人間の *ordre* 内に、更に身体・理性・心情の三つの *ordre* の存在を示し、身体と心情、あるいは理性と心情を必要に応じて対比させつつ、信仰の最終的な根拠を心情のうちに置いた。

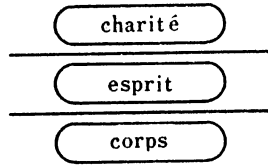
以上の検討をふまえ、最後に *trois ordres* 真の意味をたずねておこう。私見によれば、L.308 によって与えられる *trois ordres* の思想は、これまでに検討した諸要素、即ち *ordre* の区別、相反から次元的对立への展開、心情と理性および身体の関係、隠れたる神、象徴、予言といった教義等々、これらすべての要素の総合であり集約である。これらの要素が、イエス・キリストの偉大さを証明するために、L.308 に於て結集し、立体的な美しい構造に収斂したと言えるだろう。逆に言えば、これら諸要素のおのおのは、*trois ordres* というひとつのサンテティックな思想が、「アポロジー」の展開の必要に応じて示した一側面と考えうる。このような観点に立つなら、*trois ordres* は単にひとつの断章の中にだけ存在するのではなく、「アポロジー」全体を支える最重要な思想だと言えるだろう。

身体・精神・心情の三つの *ordre* があり、心情が恩寵に導かれつつ自己を神へ向けて超える時、超自然的な愛の *ordre* が現出する（図7参照）。真のキリスト教徒はこの第三の *ordre* に属する。人間は下位の二つの *ordre* を脱け出て、第三の心情＝愛の *ordre* に立たねばならない。それがパスカルの「アポロジー」の要請である。下位の *ordre* も固有の偉大さを持つとする点に、またパスカルの思想の特徴があるが、そこに留まる限りは滅びは免れないとされる。同時に第三の *ordre* も、決して救いを保証された確信の場ではなく、信頼と怖れの交錯する緊張の場であり、それ故に人間は不断の全的なアンガジュマンを要請されるのである。

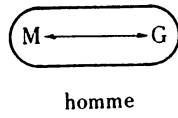
パスカルの時代は、新しい近代科学の形成下に、人間が理性によって自立し、神が固有の機能を失い初めた時代であった。近代人にとっては唯一自然の *ordre* だけが存在し、彼はこの基本的に善である *nature* に基盤をおきつつ自己の幸福を追求する。一方キリスト教自身もユマニズムの深刻な影響を免れえず、その内部にイエズス会に代表される *ordre* の一元化の傾向を示しつつあった。パスカルの *trois ordres* は、このような近代的一元化の傾向に抗して、キリスト教をその純粹性に於て擁護することを企図したものだと言いうるであろう。

付記 紙幅の関係で十分に論旨を展開しえないのを残念に思う。また参考文献表も省略した。

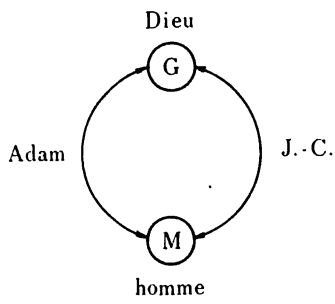
☒ 1



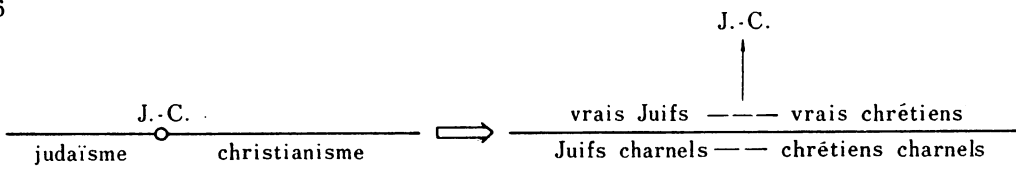
☒ 2



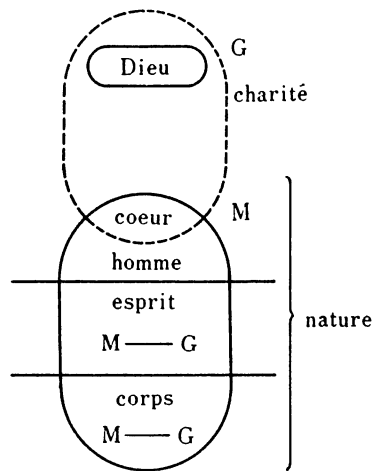
☒ 4



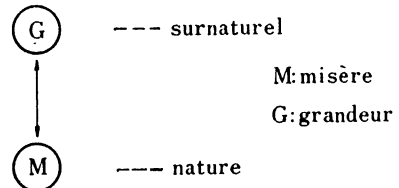
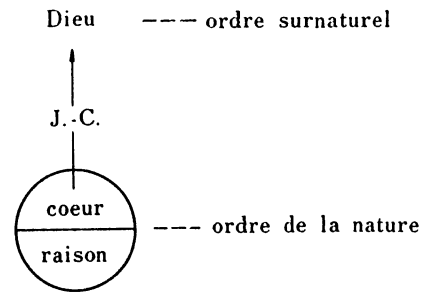
☒ 6



☒ 7



☒ 3



☒ 5

